



満之は、明治三一（一八九七）年八月一日から『臘扇記』と題する日記を起筆している。その日記の一〇月二四日に記載された長い文章から抜粋したのが、この文章である。

自己とは何かという問いをうけて、自己とはほかでもないまさしく、絶対無限（阿弥陀仏）の妙なるはたらきに乗托（帰命）して、そのはたらきの道理のままに、この境遇に落在するもの、これが自己である、と応えている。

阿弥陀仏のはたらきに帰命するという念仏との出会いを、真実の自己の内容として表現しており、満之における宗教的自覚が、近代という時代性を縁として示されたものといえるだろう。

また絶対無限に乗托するところから開かれてくる光景が、死生、追放、獄牢等が憂うるにたらない、意に介するものではない（問題とはならない）とある。念仏によって、死生等がなくなるのではなく、それらにとらわれることがないとしている。苦しみにとらわれる方が翻（ひるが）って、あるいは苦しみのもつ意味が転換されて、阿弥陀仏の呼びかけとして聞こえてきたという、満之の言葉にならない喜びがあるように思われる。

この一文は、この後、雑誌『精神界』（一九〇二年六月発行）に「絶対他力の大道」として、他の文章とともに掲載され、多くの人に親しまれることになった。しかしこの日記の一文の前後には、多くの内容を示す文章が

## 巻頭言解説



## 【訃報】

### 池田勇諦氏

記念館創設に深くご尽力下さった池田勇諦氏（西恩寺前住職）が、六月二十九日ご逝去されました（満九〇歳）。

約四〇年前、西方寺で満之の顕彰活動を熱心に行っていた山崎正廣氏（一九二九～二〇〇〇）が、記念館創設について池田先生に相談されていました。

そのご縁もあり、記念館創設が具体化する中、住職に色々とご教示いただきました。浜風臘扇忌の講師も、一九九六年、二〇〇二年（百回忌）、二〇一九年の三回に亘り勤めていただき、歴代講師の中で最多です。ここに謹んでお悔み申し上げます。

先生のご自坊の同朋講座において長年聴聞されてきた方々に寄稿していただきました。



百回忌（二〇〇二年）集合写真より  
左から三番目が池田勇諦氏

## 清澤満之師を「先覚」と仰いだ先覚

百々海真（東京六組了善寺住職 暁宇会代表）

池田勇諦先生が、満九〇歳一〇か月余を一期として本年六月二十九日にご西帰された。お育てに与った私に真つ先に浮かぶのは、二〇一三（平成二五）年十一月二六日、水野暁輝法師（水野輝子様・愛知県知多郡東浦町）が自費刊行された西村見暁師『世界統一的国家の原造者 清沢満之「絶対他力の大道」』を、当時七九歳の池田先生がご自坊の「同朋講座」で講じる生涯最後の聖教として選ばれた、その態度決定である。

西村見暁師（一九一五～二〇〇三）は、法蔵館版『清澤満之全集』（暁鳥敏・西村見暁共編・全八巻・一九五三年）刊行の中心的役割を担われた先達であり、主著『清澤満之先生』法蔵館・一九五一年）は研究者必読の名著として今も名高い。

だが、暁鳥師ご西帰後、若い頃から身を置いていた明達寺（石川県・暁鳥師の自坊）を離れてから、ご自身の足で歩み通された西村師の後半生は波紋を呼び、一部には批判もあり、今では広く知られていないのも事実である。

それだけに、そのような世評を選びずて、この一冊を選びとった池田先生の態度決定は、編集刊行に携わりながらも周囲の眼を気にする私への生きた教えであった。先生は、『仏説無量寿経』の「宜自決断」（『真宗聖典』第一版六五頁・第二版六九頁）の一語を尊び、多く揮毫されていた。右往左往すればこそ至

書かれており、それらと合わせてこの文章を了解する必要がある。

（名畑直日児）

## 二〇二六年度企画展（予告）

「清澤満之が出会ったことば、遺（のこ）したことば」

会期：二〇二六年三月五日（金）～二〇二七年三月一日（月）

### 【開催にあたって】

清澤満之（一八六三～一九〇三）は、四〇年に満たない人生のなかでどのような言葉に出会い、そこからどのような言葉や文章を遺したのか。それらの現代語訳を通して内容をたしかめたい。

さらに満之の生涯をたどりつつ、それらが記された元の資料、また同時代の関連資料も合わせて見ながら、満之がどのような状況のなかで、それらの言葉に出会い、そして満之自身の言葉として表現したのかを確認したい。さらにそこに流れる満之の宗教的信念（念仏との出会い）を見ていきたい。

なお、満之のことばについては、二〇二五年浜風臘扇忌において、「私の心に触れた清澤満之のことば ベスト3」（アンケート）を実施したときの言葉と文章の票数に基づいて展示する（本誌五頁を参照してください）。

り届く、如来の天命として聞きとつておられたと拝察する。決断の信、とも言われていたが、この時の態度決定はまさにそれであり、立脚地の違いを身を以て見せてくださった。

二〇一四（平成二六）年二月四日の同朋講座から講読が始まり、二〇二二（令和四）年二月四日に最終章「精神主義の国家像」を講了された。講座は、清澤師や西村師の仰せを通して真実を共有せん、とする先生の志願に貫かれ、真剣勝負の緊張感がみなぎっていた。全頁を講読される中で、如来の実体化を生みだす恐れあり―と二行余りの一文に「はたらき」の一語を加えて読みかえられたことがあった。眼光紙背に徹した聴聞の姿勢に驚かされた。と同時に、私は未だ一字も読めていないのだ、と圧倒された清々しさが今も深く刻まれている。

二〇二五（令和七）年二月四日、今生最後となった同朋講座の冒頭、池田先生は次のように仰った。

「この「同朋講座」ですけれども、近年一貫して申しあげておりますことは、「自己とは何ぞや。是れ人世の根本的問題なり」という先覚のお言葉に導かれて、私たちが聞法するということは「精神論でなく存在論なのだ」ということを一貫して聞いていただいてきておるわけであります」。

「先覚」、清澤満之師への深い謝念に満ちた、池田先生渾身の表白である。法名は一道院釋勇諦、その名のとおりのご一生を仰ぐことである。南無阿弥陀仏

## 参考書籍のご案内

西村見暁『有縁の知識 暁宇会選書4―仏の教えは家に在り―』（暁宇会、二〇二二年）

暁鳥敏の弟子の一人、西村見暁（一九一五～二〇〇三年）が、雑誌『香草』、『広大会』（共に香草舎発行）に掲載した、二二編（一九五二年～一九五七年）、そして鹿兒島香草舎から発行した『真の自分の願い―意識四十八願―』（一九七五年）を収載している。

「有縁の知識」（六編）、「末法の世は明けた―清沢先生の阿含読誦―」「世界の消される年」「生死巖頭」「咯血したる肺病人」「大臘扇忌」「臘扇堂讃仰―修行するところの如き莊嚴仏土、汝自ら当に知るべし―」「出家」「和国の有情」「誕生仏」「大浜風忌」（二編）「最後説法」「五逆者」「身体の念仏」、そして西村の座談の様子・「淋しさの中から―大垣香草会座談―」（高木鈴子）を収載し、池田勇諦「すでに法身となりて―発刊を随喜―」、島崎曉民「そこ、動くな」が掲載されている。

西村の四〇歳頃の文で、師・暁鳥敏との出会いを軸に、満之、『無量寿経』、釈尊等が論じられている。曖昧さを寸分も許さない恐ろしさと、どこまでも救うという慈愛の心に貫かれた世界に触れることができる。

お求めは、了善寺（〒一〇五―〇一〇四 東京都港区芝二―一三―二）、電話：〇三―三四五一―五六四〇まで。